

「実は、拙者は。」設定資料

## I. あらすじ

時は享保8年(1723年)、将軍徳川吉宗の治世。深川佐賀町の長屋、市蔵店で暮らす八五郎は、棒手振りで青物を売って暮らす、江戸のどこにでもいそうな実に影の薄い男。秘かに同心の手先となって、市井の噂話などをときどき番所に流していることくらいが、平凡な彼が抱えているささやかな秘密だった。

そんな八五郎はある日、長屋の右隣の部屋に住む浪人・雲井源次郎が、江戸で話題の幽霊剣士「鳴かせの一柳斎」であることを偶然知ってしまう。さらに、仲良しの鳶の辰三は江戸中で大人気の義賊・ハツ手小僧であると判明。そして自分の上役である定町廻り同心の村上典膳が実は、法で裁けぬ巨悪を闇のうちに成敗する秘密組織「隠密影同心」の一員だと知る。

ごくありふれた八五郎の周りの日常。だが、そこで触れ合う善良な人々は、ことごとくが影の顔、秘密の顔、裏の顔を持っていた——「どうしてこんな、みんな裏の顔だらけなんだ！」途方に暮れる八五郎はいつしか、江戸を揺るがす巨悪の陰謀に巻き込まれていく。

裏の顔を知ってしまったことを、絶対に本人に気付かれてはならない。

影と秘密と裏と忍びと——隠された顔をもつ凄腕の者たちの間で、影が薄く何の取り柄もない八五郎は、皆が秘密を守りながら幸せになれる道を求めて、独り奮闘するのだった。

## II. 登場人物

### 1. 八五郎(22歳)

深川佐賀町の長屋、市蔵店で暮らす善良でお人好しな小心者。青物を売る棒手振りをやって暮らしている。おそろしく影が薄いため、人の中に紛れると誰にも気に留められず、尾行しても決して気付かれない。そんな特技を生かして、見知らぬ店に何食わぬ顔をして上がりこみ、気付かれない程度の小銭を帳場からちょろまかすといったケチな盗みを時々やっていた。ところが、ある時盗みに入った店で客の婆さんが突然急病で倒れ、放っておけずに介抱してしまったせいで悪事が露見する。

八五郎を捕まえた定町廻り同心の村上典膳は、根が善良な八五郎の再犯の可能性は低いと判断し、罪を見逃す代わりに典膳お抱えの密偵「八丁堀の犬」になることを命じた。それ以来、密偵であることを隠して普通に暮らし、町内に不審なことがあったら密告するという役目を与えられている。

また、顔を隠していたり声を変えていたりしても、正体が誰なのかを雰囲気から正確に見抜ける特技もあるのだが、本人はその特技の凄さに全く気付いていない。近所に暮らす浜乃に秘かに思いを寄せている。



## 2. 雲井源次郎／鳴かせの一柳斎／出雲忠左衛門(31 歳)

八五郎の右隣の部屋で暮らす浪人。普段は何もせずゴロゴロしており、時々やくざ者に雇われて用心棒などをして食いつないでいる。その正体は、最近江戸の町を騒がす幽霊剣士「鳴かせの一柳斎」。不気味な面頬で顔を隠した状態で江戸のあちこちに現われては、身なりのよい侍に襲いかかり、従う供回りの者や中間たちをすべて峰打ちで気絶させたあと、「抜け……刀を抜け……」と不気味な声で呼びかけてくる。



だが、それで相手が刀を抜くと「鳴かなんだか」と言って溜め息を吐いて自分の刀を納め、「去ぬか？ 死ぬか？」と相手に尋ねる。それで去ることを選べば何もしないが、侮辱されたと怒って挑みかかった者は全て斬られて重傷を負っている。

柳のようにゆらゆらと構える捉えどころのない剣で、まるで撫でているかのように見えるゆっくりとした柔らかな太刀筋ながら、気がつけば鮮やかに一刀両断されているという、摩訶不思議な剣術を使うことから、いつしか人々は彼の事を「鳴かせの一柳斎」と呼ぶようになった。

かつては清廉な大目付・青山勘解由の忠実な家人、出雲忠左衛門だったが、小清河為兼の悪事に気づいて秘かに調べを進めていた青山勘解由が、小清河の差し向けた刺客に闇討ちされ御家が断絶。それ以来、主君の仇を探し出し敵討ちすることを誓い、正体を隠して浪人暮らしをしている。

青山勘解由が殺された時に、その愛刀<sup>きんしゃくまる</sup>「金錫丸」が奪われていたことから、金錫丸を持っている者が仇に違いないと、そのゆくえを探している。金錫丸は抜く時に「シャリン」と錫杖が鳴るような美しい鞘走りの音がすることから名付けられた名刀である。そこで源次郎は、金を持っていそうな侍を見つけては、刀を抜かせて金錫丸かどうかを確かめていた。

人付き合いが面倒で斜に構えており素直ではないが、実は情に厚い。近所の人や八五郎がお節介を焼くと、いつも面倒くさそうな顔をするが、かといって拒絶はせず、受けた恩は絶対に返す義理堅さがある。

## 3. 鳶の辰三／八ツ手小僧(25 歳)

八五郎と同じ佐賀町内に住む友人で腕の良い鳶。金離れがよく気風のいい典型的な江戸っ子。親分肌で頼りがいがあり情に厚く、誰からも慕われている。いつも黒一色の服しか着ず、色白の肌に施された白浪の見事な彫り物が美しい。堅気の間人として暮らしているが、侠客や博徒ともいづらか交流がある。



その正体は義賊の八ツ手小僧。悪徳商人の屋敷にだけ忍び込み、盗んだ金を真夜中のうちに貧しい庶民の家に投げ込むことから、江戸中の庶民から絶大な人気を得ている。盗みに入った商家には、その証として八ツ手の文様の焼印を押した木札を置いていくことを習わしとしている。

4. 村上典膳／隠密影同心(34歳)

八五郎を秘かに手下にしている、南町奉行所に属する定町廻り同心。謹厳実直さだけが取り柄の、何の面白味もない人間を装っているが、その正体は老中直属の秘密組織「隠密影同心」の一員。隠密影同心は、法で裁けぬ巨悪を暴き出し、表沙汰になる前に闇に葬ることを目的とする秘密組織で、誰かに正体を知られてしまったら、絶対に殺して口を封じなければならないという鉄の掟がある。最近新しい上役である老中の小清河為兼に命じられ、勘定奉行・蓼井氏宗が裏で進めている悪事を追っている。小清河のことを清廉な御方だと信じこんで信賴している。



普段は剣の腕を隠しているが、実は小野派一刀流の達人。基本に忠実で小細工は一切せず、練り上げられた一撃を正々堂々と正面からぶつけて敵を圧倒するという豪剣の使い手。正体を現した時だけ、生真面目な口調が若干くだけて少しだけ荒々しい本性が出る。

5. 浜乃／公儀御庭番 夕凧の真砂(19歳)

八五郎の隣の長屋、九郎兵衛店で父の藤四郎と二人で暮らす町娘。近所でも有名な器量良しで、誰に対しても屈託なく接し、よく笑う明るい性格。お節介で好奇心旺盛で、面白そうなことがあるとすぐに首を突っ込みたがる。



その正体は將軍直属の忍者集団、公儀御庭番に所属する凄腕のくノ一、夕凧の真砂。伊賀忍術の達人で、どんなに強力な敵の攻撃を受けても、巧みに力を逃がして静かに止めてしまうことから「夕凧」という通り名で呼ばれている。

江戸市中の情報を得るため、藤四郎と父娘のふりをして昨年から二人で長屋に潜伏している。最近勘定奉行・蓼井氏宗が裏で行っている陰謀を追っている。

6. 蓼井氏宗(56歳)

もとは微禄の身だったが、小清河為兼に取り入る事で異例の抜擢を受け、勘定奉行まで成り上がった悪党。小清河が考えた悪事の実働部隊として、これまでも様々な悪事に手を染めてきた。

悪徳両替商の尾黒屋と結託し、器量のよい町娘に体よく借金を負わせて借金のかたに連れ去り、三田にある自身の屋敷の中に囲っている。そしてそれを「黒吉原」と称する売春宿に仕立てて、立場上おおっぴらに吉原通いができない幕府の高官や高位の大名などを招待して遊ばせ、彼らの歡心を買っていた。

7. 小清河為兼(37歳)

眉目秀麗な若き老中。上野国で三万石を有する沼館藩の藩主。田宮流居合術の達人。由緒正しき家柄に生まれ、将来を嘱望されてとんとん拍子に出世を遂げ、昨年若くして老中に就任したばかり。清廉潔白で民のことを慈しむお方だという評判が大きい。歴代の老中が秘密裏に運用してきた隠密影同心の元締め職を前任から引き継いでおり、村上典膳の上役にあたる。

だが、その実態は根っからの大悪人。出世の為なら他人を陥れることに何のためらいもなく、競争相手となる他の藩主を、不正な手を使って次々と蹴落として老中にのし上がってきた。悪評は金の力でことごとく揉み消している。その隠然たる権力を恐れて、最近では誰も逆らうことができない。

蓼井を手先に使って黒吉原を作り上げた真の黒幕だが、公儀御庭番に黒吉原の存在が露見しつつあったことから、全ての罪を蓼井になすりつけ、隠密影同心の手で成敗することで悪事を闇に葬り、しかもそれを自分の手柄にしようと企んでいる。

#### 8. 尾黒屋欽右衛門(53 歳)

蓼井氏宗と手を組んだ悪徳両替商。蓼井に資金を与えて幕閣内に大量の賄賂をばらまかせ、それで出世した蓼井から様々な便宜を得ることであくどい商売を大きくしてきた。蓼井の手先となって、黒吉原に届けるための器量のよい娘を集めている。

#### 9. 藤四郎(51 歳)

表向きは浜乃の父親の飾り職人で、人当たりの良い純朴な好々爺。だがその正体はかつて公儀御庭番で活躍した敏腕の忍者。老齢で表舞台を退いた今は、浜乃と組んで父娘を装って長屋に住み、市井の噂話などを収集する役目を果たしている。

#### 10. 新さん(40 歳)

藤四郎と浜乃の家を時々訪ねてくる謎の旦那。名前は分からないが「新さん」と呼ばれている。貧乏旗本の三男坊だというのが、なぜ旗本の息子がこんな場末の長屋を訪ねてくるのか八五郎はずっと不思議に思っており、やけに浜乃と親しげなのでなんとなく気に食わない。姿を見せるだけで最後までプロットには絡まないが、物語のオチで、時の将軍・徳川吉宗の世を忍ぶ仮の姿であることが明かされる。

### III. プロット

#### 1. 実は、それがしは。

- (1) ある日、人気のない通りを歩いていた八五郎はたまたま斬り合いの現場に遭遇する。「抜け……刀を抜け……」と不気味な声で呼びかけながら襲いかかり、相手が刀を抜くと「鳴かなんだか」と溜め息交じりに言う面頬の剣士を見て、あれは江戸で話題の幽霊剣士、鳴かせの一柳斎だと気づく八五郎。

「去ぬか？ 死ぬか？」と問われた侍は激昂し、「おのれ、鳴かせの一柳斎！ 儂を愚弄しておって！」と斬りかかるが、一柳斎はそれを難なくあしらい、あっさり斬り伏せてその場を去る。秘かにその戦いをのぞき見ていた八五郎は「あの鳴かせの一柳斎、面頬で顔を隠

しているけど、どう見てもうちの長屋の隣の部屋の源次郎さんだよな？」と不思議に思う。

- (2) 翌日の瓦版では「鳴かせの一柳斎また現る！その正体は幽霊か、はたまた悪鬼か」と不気味な三面記事風にセンセーショナルに報じられる。八五郎は源次郎を注意深く観察するが、長屋で会う源次郎はゴロゴロしていて覇気がなく、とてもあの強かった鳴かせの一柳斎と同一人物とは思えない。町内のどぶさらいの時に八五郎は浜乃に声をかけ、先日見たことをこっそり打ち明けて相談する。
- (3) 途端に目を輝かせる浜乃。「源次郎さんって、いつも何をしているのか謎な人でしょ。いい機会だから、源次郎さんが外に出歩いた時にこっそり後をつけてみましょうよ」その会話に鳶の辰三が「なんの話をしてるんだ。ずいぶん楽しそうじゃねえか」と首を突っ込もうとするが、浜乃は「秘密」といっていたはずらっぽく笑う。秘かに浜乃に思いを寄せる八五郎は、同じ秘密を共有することで浜乃と少しだけお近付きになれたような気がして内心喜ぶ。
- (4) 八五郎は浜乃と一緒に源次郎を何日か尾行してみたが、怪しい事は何もなかった。「こんなに親しくしているのに、隠し事をするなんて本当に水くさいわね源次郎さん」と口を尖らせる浜乃。それを見て少しだけ心を痛める八五郎。(この辺りで新之助をチラリと出す)  
翌日、八五郎が棒手振りで青菜を売り歩いていると、一人の男にさりげなく声を掛けられた。男は定町廻り同心、村上典膳からの連絡役だった。「まったく、八五郎でめえはいつもどこにいるのかさっぱり分からねえから、探すのに一苦労する。たった今も目の前を三回も素通りしちまったじゃねえか。物売りは威勢よく大声を上げて目立ってなんぼなのに、よくもまあ、そんな影の薄さで棒手振りが務まるもんだな。これからは、『八五郎参上』とでも書いた幟を立てて歩いたらどうだ」「そうなんだよ。いくら声を枯らしても誰も気付かねえもんだからよ、野菜籠を地面に置いて、少し離れたとこで見とくようにしたら、その方がよっぽど客が寄ってくるくらいだ。俺、別の仕事のほうが向いてるのかな」「ちげえねえ。その影の薄さを生かして、八ツ手小僧の手下にでもなったらどうだ」「番所の人間がそんな呑気なこと言っているのかよ。だいたい、俺はもう盗みはこりごりだ」
- (5) 八五郎は実は、定廻り同心の村上典膳が秘かに手下にしている密偵の一人だった。かつて八五郎は己の影の薄さを生かして、見知らぬ店に何食わぬ顔をして上がりこみ、気付かれない程度の小銭を帳場からちろまかすといったケチな盗みを時々やっていた。ところが、ある時盗みに入った店で客の婆さんが突然急病で倒れ、放っておけずに介抱したせいで悪事が露見する。八五郎を捕まえた村上典膳は、根が善良な八五郎の再犯の可能性は低いと判断し、罪を見逃す代わりに典膳お抱えの密偵「八丁堀の犬」になることを命じた。

それ以来、彼は普通の庶民として暮らしながら秘かに町内を監視して、何か不穏な噂や動きがあれば番所に密告するという役目をこなしている。その事は周囲の人たちには秘密だ。

八五郎が船宿に行くと、そこには同じような立場の八丁堀の犬たちが一同に集められていた。典膳は彼らに対して、最近巷を騒がせる大泥棒、八ツ手小僧の話をして「お上の威信をかけて何としても八ツ手小僧を捕えねばならぬ。捕えるための有力な情報をもたらした者には、褒美として五十両を与える」と申し渡した。たかが泥棒の、しかも情報だけで五十両ももらえるというのは異例であり、皆がどよめく。

## 2. 実は、俺は。

- (1) ある日、鳶の辰三が「浜乃ちゃんが大変なことになった！」と血相を変えて八五郎の部屋に飛び込んでくる。源次郎をはじめ、近所の面々が何事かと浜乃父娘の部屋に集まる。浜乃の父、藤四郎は最初、皆に事情を説明することを嫌がっていたが、近所の面々に詰め寄られて渋々話をする。
- (2) 藤四郎は以前、少しばかり当座の金策に困って豪商の尾黒屋から五両を借りたのだが、その後「借りたのは五十両の誤りであろう、証文には確かに五十両と書かれているぞ」と言いがかりをつけられという。それで、今月末までに五十両を返さなければ、借金のかたに浜乃を連れていくと脅されていた。「汚ねえ手口だ」とご近所の面々は憤るが、「たしかに五十両の証文は残っており、きちんと確認をしなかった自分の手落ちだ」といって藤四郎はすっかり諦めている。(この後で、新之助が再びチラリと登場。「ふん。この大変な時に呑気なもんだぜ。腐っても旗本だったら、お上の力を使って尾黒屋を懲らしめてみせたらどうなんだ」と毒づく八五郎)
- (3) その日の夜、仲良しの八五郎、辰三、源次郎の三人は一室に集い、なんとかして五十両を用意して浜乃を救えないかと相談する。だがそんな大金は誰も持っておらず妙案は何も出ない。そうこうするうちに、逃亡防止の名目で浜乃はあっという間に尾黒屋に連れていかれてしまった。月末までのあと十日間で五十両を用意できなければ、そのまま借金のかたにさせてもらうとのことだった。  
「それにしてもずいぶん急で乱暴な話だ」「尾黒屋といえば、あくどい商売をしているという噂が絶えず、幕府のお偉方にも賄賂を贈って取り入っているという話だ。きっと何か悪だくみをしているに違いない」「ちくしょう、俺たちには何もできねえのか」
- (4) 八五郎は義憤に駆られ、一人で尾黒屋に忍び込み、浜乃を助け出すことを決意する。八五郎は尾黒屋に出入りする商人の付き人のふりをして、何食わぬ顔して後ろにくっついて一緒に門内に入るが、人並みはずれて影の薄い八五郎は誰にも気付かれない。すれ違う人にも尾黒屋の使用人だと思われて一切怪しまれることなく、番犬に吠えられることもなく、浜乃が囚われている部屋にあっさりたどり着いてしまう。  
尾黒屋の屋敷の中を見て回った八五郎は、屋敷内のあちこちに鳴子が仕掛けられ犬が



放たれていて、やたらと物々しい警備がなされていることに驚く。

- (5) 八五郎が尾黒屋の奥まで難なく忍び込んできたことに浜乃は仰天する。一緒に逃げようと八五郎は誘うが、おとつあんに迷惑がかかると言って浜乃は拒絶する。そして、自分は先日尾黒屋の主人、欽衛門の品定めを受けた結果、勘定奉行の蓼井氏宗のところに売られることになったと八五郎に伝える。
- 浜乃が言うには、昔から尾黒屋と結託していた蓼井は、尾黒屋に命じて器量の良い町娘たちをかどわかしたり無法な借金を負わせたりして強引に集めさせ、三田にある蓼井家の屋敷に秘かに困っているのだという。蓼井はそこで、立場上大っぴらに吉原通いができない幕府の高官や高位の大名たちを相手に「黒吉原」と称した秘密の売春宿を開き、彼らを招待して遊ばせ、歓心を買うことで目覚ましい出世を果たしているということらしい。それで世を儚んで自ら命を絶った若い娘も片手では足りぬという。
- 「今をときめく蓼井様が相手では、我々庶民ではもう何も手出しはできないわ。下手に首を突っ込むとあなたの命が危ないから、私のことはもう諦めて」と浜乃は八五郎を諭して帰せる。
- (6) 己の無力さにつらく肩を落として長屋に帰る八五郎は、途中で蕎麦屋でヤケ酒をあおって帰る。やり場のない憤懣にいくら飲んでも飲み足りないので、一緒に飲もうと辰三の部屋に無断で上がりこむが辰三は留守だった。
- その時、無人の部屋の隅に脱ぎ捨てられた半纏の端にチラリと光るものが見えた。不審に思った八五郎が近づいて見てみると、それは小判だった。さらに半纏のたもとから、八ツ手小僧が盗みに入った商家に残していく八ツ手の文様の焼印が押された木札と焼印が出てくる。それで八五郎は、辰三が実は八ツ手小僧であったかと知って驚愕する。
- (7) そこで八五郎は、同心の村上典膳から以前に聞いた「八ツ手小僧を捕えるための有力な情報を持ってきた者には、褒美として五十両を与える」という話を思い出す。
- 八五郎が番所に出頭して、辰三が八ツ手小僧であることを伝えれば褒美の五十両を手に入れて浜乃を救うことができる。だがその行為は大事な友を売りとばすことになる。究極の二択に苦しむ八五郎は、誰にも相談できず悶々とする。

### 3. 実は、拙者は。

- (1) 一晩悩んだ末に、八五郎は辰三を売ってでも浜乃を助けようと決意する。「辰三もきっと、浜乃ちゃんを助けるためだと知れば喜んでお縄についてくれるに違いない」などと、罪の意識から逃れるために八五郎は勝手に理屈をつける。
- 八五郎は八丁堀の典膳の屋敷に向かう。だが典膳は不在だった。仕方なく家に帰る途中で、八五郎はたまたま道をゆく典膳とすれ違う。声を掛けようとしたが、何やら普段の典膳とは全く違う只ならぬ雰囲気だ。恐ろしくて声をかけるのを躊躇ってしまった八五郎は、そのままずるずると典膳の後をつけていく形になった。

- (2) 典膳はどこかの武士を尾行中のようだ。  
人通りのない寂しい路地に入ったところで、典膳がその武士に斬りかかる。武士も応戦するが、典膳の見事な剣術の前に全く勝負にはならず、あっという間に刀を弾き飛ばされる。典膳は武士を組み敷くと、目の前に刀を突き付けて脅す。  
「蓼井氏宗の腹心の黒川だな。蓼井の悪事を洗いざらい吐いてもらおう」二人の会話を物陰で盗み聞きしていた八五郎はその会話から、村上典膳が実は老中・小清河為兼の麾下にある秘密組織「隠密影同心」の一員であることを知る。
- (3) 典膳は小清河為兼の密命を受けて蓼井の黒吉原計画を追っていたが、肝心の黒吉原がどこにあるかを掴めておらず、それで蓼井の腹心を脅して吐かせようとしていた。  
「隠密影同心……その名は噂で聞いたことがあるぞ。決して世には出ない影の世直し組織。その正体を知られたら、必ずや知った者の息の根を止めて口を封じねばならぬという鉄の掟があるそうではないか」  
「さすがは悪臣、蓼井氏宗の手の者よ。幕閣の裏事情をよく知っておる」  
「いま、お主が自ら正体を明かしたということは、儂を決して生かして帰すつもりはないということ。ならば、死ぬと分かって主君の秘密をベラベラと喋る馬鹿がどこにしようか。それにしても呑気なものだな老中の犬め。真実を何も知らずに、喜々として駆け回っておるわ」それだけ言い残すと、黒川は自ら舌を嚙んで絶命した。
- (4) 八五郎は「俺は典膳様の裏の顔を知ってしまった……それがバレたら殺されるってことだよな……こんなのを覚えてしまった直後に、典膳様とまともに話ができるわけがねえ。とりあえず今日のところは帰って、明日仕切り直そう」とぶるぶる震えながら帰宅する。
- (5) 家に帰った八五郎は、冷静になった頭でもう一度考える。  
辰三を番所に突き出すかどうかは、やっぱり最後にもう一度辰三の顔を見てから決めようと思い直し、八五郎は辰三の家に向かう。しかし辰三は不在だった。家の中を覗いてみた八五郎は、物陰に隠された尾黒屋の図面を発見する。図面には侵入・逃走経路が矢印で書き込まれ、盗みの詳細な計画が記されていた。
- (6) 辰三は八ツ手小僧として尾黒屋に忍び込んで金を盗み、その中から五十両を浜乃の家にばら撒いて浜乃を救おうとしているのだと八五郎は気づく。そうすれば、尾黒屋から盗んだ金を尾黒屋に払うだけなので誰の懐も痛まず、何も知らない尾黒屋は自分の金で浜乃を返すということになる。いかにも辰三の考えそうな痛快なやり方だった。  
そんな辰三の熱い思いも知らず、辰三を裏切って番所に売り渡そうとしていた自分のあさましさに、八五郎は後悔の涙を流す。  
だが、その尾黒屋の図面は古く、先日八五郎が見た尾黒屋の内部は改築されて間取りがすっかり変えられていて、警備も格段に厳重になっていた。もし図面に描かれている侵入・逃走経路の通りに進んだら、袋小路に追い込まれて間違いなく辰三は捕まってしまうだろう。八五郎は大いに焦る。



- (7) 八五郎はそこで、隠密影同心の典膳が蓼井の悪事を追っていたことを思い出す。典膳は蓼井の黒吉原の場所が分からず困っていた様子なので、ならば黒吉原は三田の蓼井屋敷にあると自分が伝えてやれば、そんな巨悪を小清河が放っておくはずがなく、隠密影同心を差し向けて蓼井を成敗してくれるのではないかと考える。蓼井さえいなくなれば黒吉原も消滅するわけで、不要となった浜乃も無事に戻ってきて全部円満に解決するに違いない、と八五郎は期待する。
- (8) 翌日、八五郎は番所に行って典膳に会い「町中でこんな噂話を耳にしたんですがね」という態で、蓼井の三田の屋敷の中に黒吉原が置かれていることを典膳に伝える。典膳は「武家の風紀の取り締まりは目付の役目であり、町方の同心には一切関わりのないこと。それにあの蓼井様が相手とあっては知らぬが仏じゃ」と全く取り合わない様子だが、典膳の目つきが確実に変わったのを見て、間違いなく典膳は動いてくれるだろうと八五郎は確信する。
- (9) 場面が変わって夕暮れ時の三田。人気のいない道をゆく蓼井氏宗の前に鳴かせの一柳斎が現われて、蓼井の供回りをあつという間に峰打ちで全員気絶させる。  
「抜け……刀を抜け……」  
「お主はあの、鳴かせの一柳斎。黙って刀を抜けば、お主が何もしないということは重々承知しておく。これで満足か」と、抵抗せず素直に刀を抜く蓼井。  
その音を聞いて「鳴かなんだか」と言い、「去ぬか？死ぬか？」と尋ねる一柳斎に「そんなもん。去ぬるに決まっておろうが」と言い残して去ろうとする蓼井だったが、そこでふと何かを思いついたらしく、ニヤリとあくどい笑みを浮かべて一柳斎に声を掛ける。  
「おい一柳斎。お主、儂の用心棒にならぬか？ 儂もいろいろと命を狙われる危うい立場にいるもんでな。お主ほど名の知れた凄腕の剣士が用心棒についたとあらば、よもや襲いかかってくる愚か者もおるまい。報酬ははずむぞ。半年で十両。前金でどうだ？」  
その話を聞いて、ピクリと動きを止める一柳斎。しばらく考え込む。  
「ふふふ。幽霊の正体見たり枯れ尾花。幽霊剣士も金が欲しいか」  
「……前金で五十両、三カ月。それならば考えてもよい」  
「ぐぬう……足元を見おってこの貧乏侍め。まあよい。それでわが命がつながると思えば安いものよ。ふふふ。はははは！」

#### 4. 実は、私は。

- (1) これで典膳がきっと蓼井を斬り捨ててくれるはずだ、と安堵して八五郎は機嫌よく家に帰る。真実を言う訳にはいかないが、「近いうちに浜乃ちゃんは帰ってくるぞ」とだけ皆に伝えようと思ったら源次郎がいない。なんでも、どこかの顔役の用心棒の仕事が決まったらしく、当分は泊まりこみになると言い残して出ていったらしい。  
その後八五郎は辰三から「馴染みの博徒から聞いた話なんだが、蓼井氏宗のやつ、あの鳴かせの一柳斎を用心棒に雇ったらしいぞ」という話を聞かされる。

「野郎、どうやって一柳斎を探したんだ、それに一体いくら積んだんだって、侠客連中の間じゃ今朝からその噂でもちきりだ。あんな凄腕を自分の手下にするなんて、これでますます蓼井は調子に乗って悪事三昧だろうな」  
その話を聞いて、顔面蒼白になる八五郎。

- (2) 源次郎はきっと、浜乃ちゃんを助け出すために五十両を稼ごうと、嫌々ながら蓼井の用心棒を引き受けたのだ——源次郎の優しさに思わず涙ぐむ八五郎。  
だが、自分が典膳に黒吉原の場所を教えてしまったせいで、きっと典膳は蓼井を成敗しに行くはずで、そうすればそこで用心棒の源次郎と戦うことになってしまう。  
凄腕のあの二人が激突したら、二人とも到底無事で済むとは思えない。何とかして二人を止めなきゃ！ と焦る八五郎。
- (3) 打てる手は何もないが、それでもとりあえず典膳を探そうと、八五郎は八丁堀の典膳の屋敷に行く。だが典膳は不在で、どこに行ったのかと尋ねたら、三田のあたりの武家屋敷に行くと言って出ていったらしい。蓼井を斬りに行ったのだなと悟った八五郎は、大慌てで三田の蓼井家の屋敷に向かう。  
八五郎が三田の蓼井屋敷のあたりに着くと、用心棒の一柳斎を引き連れて屋敷に向かう蓼井の姿が見えた。八五郎が物陰に隠れてその様子をうかがっていると、そこに宗十郎頭巾で顔を隠した典膳がやってきて蓼井に斬りつける。だが、その刃は寸前で一柳斎に止められる。
- (4) 典膳と一柳斎の真剣勝負がはじまる。二人の力量は互角で、まったく決着がつかない。八五郎は何もできず、ハラハラしながらただ物陰に隠れて眺めていることしかできない。「誰かあの二人を止めてくれ……お願いだ……」という八五郎の願いも虚しく、二人は「お互いもう気力の限界だ。次の一撃で決着をつけよう。これで必ずどちらか一方が死ぬ」と言い合い、覚悟を決めて互いに最後の必殺の一撃を繰り出そうとする。  
八五郎が思わず目をふさぎ、二人の影が交錯したその時。  
一つの人影がどこからか飛び降りてきて、二人の間に割って入り双方の攻撃を止めた。
- (5) 二人を止めたのは忍び装束を身にまとったくノ一だった。  
「何者!？」  
二人の剣の達人の攻撃の間に入って、両方を受け止めるなど、常人の業ではない。  
「私は公儀お庭番お抱えのくノ一、真砂。二人の戦いを止めに来た」  
その名を聞いて典膳が反応する。  
「真砂……聞いたことのある名だ。お主まさか、あの『夕凧の真砂』か」  
「いかにも」  
「上様直属の忍び集団である公儀御庭番衆には、あらゆる敵の攻撃も力を逃がして静かに止めてしまうことから、『夕凧』の異名をもつ真砂という凄腕の忍びがいると聞いたことがある。真砂がまさか女だったとは。それで、その夕凧の真砂が俺に何の用だ」

「お二人が戦う理由はない。それを伝えに来ただけだ」

「なんだと」

「じきに全てが分かるから、しばし時を待て。それでもまだ戦うというのであればよろしい。私がお相手しよう」

真砂にそう脅された典膳と一柳斎は黙って刀を引き、それぞれ別の方向に去っていく。蓼井はいつの間にかどこかに逃げ去ってしまった。

(6) 物陰で一部始終を見ていた八五郎、真砂を見て「忍び頭巾で隠れていたから目しか見えなかったし、声色も雰囲気も全然違ったが、あの目は絶対に浜乃ちゃんだったよな。なんで浜乃ちゃんが公儀御庭番なんてやっているんだ？」と呟く。

(7) 場面が変わって、ある豪華な屋敷の一室。斬り合いから逃げてきて全身汗だくの蓼井が、向かい側に座る謎の人間に状況を説明している。

「黒吉原も、もう潮時ではござりませぬか。先ほどは頼れる用心棒がいたから助かったものの、最近、屋敷内に不審な人影があったとか、そんな話がとみに増えております。何者かに嗅ぎつけられている恐れがござります。悪事が露見する前に、どうか手を引かせてくださりませ」

「ならぬ。それは断じてならぬぞ蓼井。勝手に手を引いたらどうなるか、分かっておろうな」

「ははっ」恐怖のあまり冷や汗をダラダラ流して平伏する蓼井。

## 5. てめえは、何者だ。

(1) 「浜乃ちゃんがああ強い忍者なんだとしたら、なんでわざわざ蓼井の奴なんかにおとなしく捕まったりなんかしたんだ？」

腑に落ちない八五郎は長屋に帰ると、浜乃の父の藤四郎に「あんたも実は公儀御庭番なんだろ？」と詰め寄る。

その途端、善良な好々爺だった藤四郎の雰囲気が一変し、目にも止まらぬ早業で八五郎の背後を取って腕をひねり上げ、首筋に短刀を突き付けて「どこで知った？どこまで知ってる？」と冷たい声で尋ねる。

(2) 八五郎はたまらず典膳と一柳斎の正体とこれまでの経緯を正直に話す。驚きを隠せない藤四郎。

「なんと、村上典膳殿が隠密影同心だったのか」

「同じ幕府の組織なのに、おまえらそんなのも知らないのか」

「隠密影同心は老中の直属で、公儀御庭番は上様の直属。二つの組織の対抗意識は激しく、誰が所属しているかはお互いに秘密で、我々は誰が隠密影同心なのかをほとんど知らないのだ。なぜお主がそんなことを知っているのだ」

「たまたまだよ」

「鳴かずの一柳斎だって、公儀御庭番ですら未だにその正体を全く掴めなかったのだ。お主が一柳斎の戦っている場に居合わせて、その正体が源次郎殿だと教えてくれなければ

永遠に分からずじまいだった」

「でも、浜乃ちゃんと俺で後をつけた時には何もなかったぜ」

「その後、ちゃんと公儀御庭番で調べ上げて、彼が一柳斎であることは裏を取った。それは浜乃にも教えてある。一柳斎は相手に逃げ道を与えて正々堂々と戦っており、その振る舞いは決して土道に背くものではない。むしろ武芸を生業とする武士としては、斬られた者の鍛錬不足のほうが責められるべきものでもあるから、公儀としても今のところはお目こぼしする方向だが、治安上その動きは把握しておかねばならぬ。教えてくれたことに改めて礼を言う」

「たまたまだよ」

「まさか、他にもそんな話があったりしないだろうな？」

「……もう、ついでだから言っちゃおうがな、同じ町内の辰三は八ツ手小僧だ。藤四郎さんから信じて明かしたが、だからといって絶対に辰三さんを捕まえるんじゃねえぞ」

「なんだと？お主、一体どうやってそんな秘密を……？」

「だから、たまたまだってば！ 浜乃ちゃんとアンタも忍者だったし、なんでどいつもこいつもこんなに裏の顔だらけなのか、俺が聞きたいくらいだよ。それよりも、なんで浜乃ちゃんはあるに強い忍者なのに蓼井に捕まったんだ。そのせいで俺たちも色々とぼっちりだ」

「浜乃が捕まったのは、尾黒屋に潜入して蓼井の悪事の尻尾をつかむためだ。御黒屋に捕まって中に入りこめば、同じように囚われの身になった娘たちと接触ができる。娘たちが早まったことをせぬよう、じきに助けが来ることを秘かに伝える役目だ。それでわざと五十両の借金を作って、黒吉原の中に浜乃が潜入できるよう仕向けた」

「ふざけんな。お前らのその要らぬ芝居のせいで、典膳様と源次郎は殺し合いになったし、早くしねえと浜乃を助けようと辰三が尾黒屋に忍び込んでしまうぞ。あいつが持っているのは古い図面だから、それを信じて忍び込んだら間違いなく辰三は捕まる。俺は早いとこ、この騒ぎを止めなきゃならねえんだ」

「まさか、この町内の連中がこんなにもお節介焼きだとは思っていなかったのだ。だが大丈夫。辰三も捕まらせはしないし、典膳と源次郎の戦いは浜乃が何とかする。お主は典膳に、明日の夜に蓼井が黒吉原に行くらしいから、そこが狙い目だって伝えろ」

(3) 場面が変わって、蓼井の屋敷でくつろぐ蓼井と、その横に控える一柳斎のシーン。

そこに浜乃が入ってきて茶を入れ、少しだけ会話をして去る。なぜ浜乃がこんな所にいるんだ？ と面頬の下で驚愕の表情を浮かべる一柳斎。

浜乃が去ったあと、一柳斎が蓼井に尋ねる。

「いまの娘はずいぶんと器量よしだったが、武家の奉公人というよりはただの町娘といった風情だったな。あの娘はどこから奉公に来ているのか？」

蓼井は一柳斎が浜乃に興味を持ったのかと勘違いして、黒吉原計画の事を得意げに自分から話す。

「さっきの娘は五十両の借金のかたで手に入れて、いずれ黒吉原に入れるつもりなのだが、借金の支払い期限が来るまでここで小間使いをさせている。もしお主があの子を気に入ったのなら、いいだろう、一生働きの用心棒を務めることを条件に、あの子をお主に連れて

やってもいいぞ」

一柳斎は、浜乃が難に遭ったのは背後で糸を引いていた蓼井のせいであったかとそれで初めて悟り、そんな男の用心棒になってしまったことを心の中で激しく後悔した。

- (4) 翌日、黒吉原に向かう蓼井と一柳斎。それを待ち伏せて襲いかかる典膳。

「お主、また来たのか」

「悪を斬るまでは何度でも戦いを挑むのみ」

たちまち典膳と一柳斎の勝負になるが、今度はあっさりと決着がつく。「ぎゃああ」と、腕を斬られたふりをして刀を取り落としてうずくまり、わざと負ける一柳斎。

頼れる用心棒を失って取り乱し、逃げ出した蓼井を典膳が追いかける。蓼井が「儂は命じられて嫌々やっていただけじゃ！ 儂は悪くない！ 儂を斬るくらいなら、まず先にあのお方を——」と見苦しく叫んだところで、典膳は「申し開きは閻魔様の前ですがよい」と言って蓼井を一刀両断にする。

蓼井を斬り捨てたあとで典膳が一柳斎のほうを向き直ると、さっきまでの痛みようが嘘のように一柳斎はケロッとしており、落とした刀を平然と拾いあげている。

「さきほどの勝負、お主はなぜわざと負けた」

「戦う理由がなくなったからさ」

「……お主とはまた、敵味方としてではなく、きちんと手合わせしたいものじゃな」

- (5) すると突如そこに、抜刀した武士の一団が現われ、典膳と一柳斎の周りを取り囲んだ。

「我こそは老中、小清河為兼である！ 勘定奉行 蓼井氏宗殿を闇討ちする不埒者よ。儂はたまたま通りがかっただけだが、その振る舞いのすべてを見届けておったぞ。もはや捕えて公儀のお裁きにかけるまでもない。即刻この場で斬り捨てよ！」

## 6. 実は、貴様は。

- (1) そんな、たまたま通りがかかるなどという都合のいい偶然があるか？と戸惑う典膳。そもそも自分は小清河の命令で蓼井を討ち果たしたのに、なぜこんな言われ方をするのだ——そうしている間にも、小清河の家人たちが次々と斬りかかってくる。一柳斎が「事情はよく存じ上げないが、とにかく我ら二人、命を狙われていることは間違いない。ここは協力いたそう」

共に戦う典膳と一柳斎は善戦するが、多勢に無勢で深手を負い、壁際に追い込まれる。

- (2) 典膳はここで、自分が嵌められていたことに気づく。「ようやく意図が掴めたぞ……黒吉原の一件、小清河為兼、お主が黒幕であったか！」

「どこの誰だかは知らぬが、勘定奉行である蓼井を殺めた重罪人が何を言うか。何のことやら、さっぱり分からぬなア」

「私はお主の指示で、蓼井氏宗を斬り捨てるべく動いていたが、お主はその私をこうして闇のうちに葬り去ろうとしている。つまり、私を蓼井と道連れにして、臭い物にまとめて蓋をしておこうという魂胆だな。私はいま全て理解をした。真の奸物は蓼井ではない。裏で糸

を引いていた巨悪は小清河為兼、お主じゃ！」

「ふふふ。今頃になって気づいたか。だがもう遅い。冥途の土産に聞かせてやろう」  
得意げにこれまでの悪事の全貌を典膳に語る小清河。

- (3) 「隠密影同心としてのこれまでのお主の働き、実に見事であった。これほどの腕利きを失うことは私としても心が痛い。せめてもの情けとして、私が自ら手を下してやろう」  
そう言って刀を抜く小清河。すると「しゃりん」という鞘走りの音が響く。その音を聞いた一柳斎は愕然とする。

「その鞘走りの音、まさかその刀は『金錫丸』！」

「ん？ この刀の事を知っているということは、お主まさか、青山勘解由に縁のある者か」

「そうだ。忘れもしない三年前——」

そこで一柳斎の口から、青山勘解由との関係、源次郎が一柳斎となるまでのいきさつ、金錫丸の特徴が語られる。

「——抜く時に独特の音が鳴るその刀を探すために、私は鳴かせの一柳斎となって、金錫丸を持っていそうな身なりの良い侍を襲っては刀を抜かせていたのだ」

それを聞いた小清河はますます得意になり、その口から、青山勘解由を闇討ちさせたのは小清河であるという真相が語られる。「佞臣・小清河為兼、絶対に許さんッ！」憤怒のあまり叫び声を上げる一柳斎。高笑いする小清河。

「今日はなんと幸運な日であろうか。青山勘解由の遺臣に腕利きの剣客がいて、その者が私をつけ狙っているという噂は、以前からずっと私の心を悩ましていた。それがまさかあの、鳴かせの一柳斎だったとは。だが、こちらも息の根を止めることができる。明日からは枕を高くして眠れるわ！ ははは、ははははは！」

- (4) 「かかれ！」と小清河が家臣たちに号令をかけようとしたその時、二人を助けなければと思った八五郎は、とっさに物陰から出て、たまたま通りがかった一般人のふりをして大声で叫んだ。

「ひいいいい！ 人殺し！ 人殺しだあア！！」

そして腰が抜けたのを装ってその場にへたり込む。

それを見て小清河は忌々しげに舌打ちをする。「邪魔が入ったな」

騒ぎを起こして野次馬を集め、殺害できないようにしようと考えた八五郎だったが、それでも小清河は動じない。「こやつらを生かしておくわけにはいかぬ。この場を見てしまったあの不運な町人もじゃ。人に見られる前に手早く済ませろ」と号令をかけ、それに合わせて家臣たちが一斉に典膳と一柳斎と八五郎におどりかかる。手負いの二人にそれを受け止める力はもう残されていない。「助けてえ」と情けなく泣き叫ぶ八五郎。だがそこで、小清河の家臣たちが背後から手裏剣の攻撃を受け、一斉に崩れ落ちる。「なにい!？」

- (5) 「いまの一部始終、全て見届けさせて頂いたわ、老中・小清河為兼」

近くの松の木の上に立っていた真砂が、小清河にそう告げる。その周囲には公儀御庭番衆の忍びたちが何人も控えていて、小清河の周りを取り囲んでいた。



「隠密影同心の動きが最近どうにもおかしいと睨んで張っていたら、まさかその大元締めがここまで腐っていたとはね。かくなる上は一片の情けも無用。覚悟なさい、小清河為兼」

- (6) 家臣を全員倒され、追い詰められる小清河。すると一柳斎が一步進み出て言う。

「ここから先は私にやらせてほしい。主の仇は、何としても自分の手で討ち取りたい」  
一対一の真剣勝負に、小清河は「そんな手負いで何ができる。立っているだけで精一杯だろう。せめてお主だけでも地獄へ道連れじゃ。金錫丸の妙なる鞘走りの響きと共に、この儂の居合の奥義で真っ二つにしてくれよう」と刀を構える。だが、一柳斎の踏み込みからの突きが小清河の抜刀よりも一瞬早く肩を貫き、小清河は崩れ落ちる。

「殿……」と万感の思いを込めてつぶやく一柳斎。

「金錫丸は、その美しい鞘走りの音からどうしても居合で使ってみたくなるものだが、音が出ることで抜刀の速さが削がれるので、実は居合に使うことは禁忌なのだ。この刀の真骨頂は、激しい鏝迫り合いでも決して刃こぼれしない刀身の強さにある。青山勘解由様はそれをきちんと理解した上で使っておられた。しよせんは、使い手の器が刀の格に見合わなかったということだな」

そう言って刀を納める一柳斎に、典膳と真砂が「お見事」と声を掛ける。

## 7. 実は、あの人は。

- (1) その翌日、尾黒屋にハツ手小僧が忍び込んで何百両もの大金を盗み出したとの報が流れる。浜乃の家にも夜のうちに五十両が投げ込まれ、これで浜乃を救い出せると皆は大喜び。

そんな長屋の面々をよそに、八五郎は藤四郎をつかまえて「なんで辰三は無事に尾黒屋に忍び込めたんだ？」と小声で尋ねる。

「なあに。世間話のふりをして辰三に、『尾黒屋が最近改築したらしいぞ』と伝えただけだ。改築を請け負ったのはどこの左官屋かと辰三がすぐに聞いてきたので、これはもう大丈夫と儂は安堵したものだ。案の定、その後ずっと公儀御庭番の忍びが辰三を見張っていたのだが、奴さんはその左官屋に忍び込んで、まんまと新しい図面を盗み出していたよ」

- (2) 無事に長屋に戻ってきた浜乃。みんなで大喜びして酒盛りが始まる。

夜になってもどんちゃん騒ぎが続く中、浜乃はこっそり八五郎に声をかけて長屋の外に誘い出す。二人きりで話す浜乃と八五郎。

「八五郎さん、あなたって村上典膳様の下で働いている密偵なんですかってね。それにしても、誰にも気づかれずにどこにでも忍び込めてしまうその影の薄さ、隠密をやるにはうってつけだわ。ねえ、ケチな八丁堀の犬なんかやめて、私と一緒に公儀隠密にならない？」

浜乃にそう誘われた八五郎は、「いや……もう裏はおなかいっぱいだよ浜乃ちゃん。俺は物売りの掛け声にも気付いてもらえない、影の薄い棒手振りがお似合いだ」と言って苦笑する。

- (3) 「それにしても、隠密影同心に撫で斬り一柳斎、夕凧の真砂、ハツ手小僧……どいつもこ

いつも裏の顔ばかりでまったく嫌になるぜ。どうして江戸はこんななんだ」  
 八五郎がそうぼやいていると、そこに謎の旗本「新さん」がいきなり現われて「お主も今回は散々な目に遭ったな」八五郎に声をかけてくる。  
 「なんでえいきなり、馴れ馴れしい奴だな。何の用だ」  
 「いや、お主には一言、詫びを言っておかねばならぬと思ってな。色々と厄介事に巻き込んでしまってすまなかった」  
 「はあ？ なんて知り合いでもねえお前さんから詫びを入れられなきゃいけないんだ」  
 「お主にとっては儂のことなど関係なからうが、儂にとっては天下万民の全てが我が子のようなものでな。此度は儂が小清河の本質を見抜くことができず、蓼井やら尾黒屋やら、悪党どもを好き勝手にのさばらせてしまった。儂もまだまだじゃなと、己の不明さに改めて恥じ入った次第じゃ」  
 「はあ？ 何言ってんだてめえ。寝言は寝て言……」  
 すると八五郎は、いつの間にか浜乃が畏まって新之助の足元に跪いて控えていることに気づく。  
 「……え？ 浜乃ちゃん一体何を……って、御庭番の浜乃ちゃんがそんな態度を取っているってことは……まさか、あんた……」  
 そこで新さんの差している刀の柄にあしらわれた葵の紋に気づいた八五郎は、口をぱくぱくさせて声も出ない。  
 「人はみな、他人に言えぬ裏の顔を持って生きておる。愉快なものじゃな。さらばじゃ！」

江戸幕府 8 代将軍・徳川吉宗は、そう言って手を挙げて挨拶すると、八五郎に背を向けて夜の闇の中に颯爽と去っていった。

#### IV.時系列

享保八年

旧暦	新暦	出来事
3/5	4/9	八五郎、鳴かせの一柳齋と出会う
3/8-12	4/12-16	(3 日後の夕方)八五郎と浜乃、初めて源次郎の後をつける その後、何度か後をつけるが正体を掴めず
3/13	4/17	(昨晚)浜乃、借金のかたに尾黒屋に連れて行かれる
3/14	4/18	藤四郎が五十両の借金を負ったことが明らかになる。八五郎、辰三、源次郎の三人でヤケ酒を飲む
3/16	4/20	八五郎、尾黒屋に潜入する～ヤケ酒を飲んで帰り、辰三が八ツ手小僧だと知る 同日夕方、源次郎が蓼井の用心棒になる
3/17	4/21	(翌日)八五郎、典膳に八ツ手小僧の正体を知らせに行く～典膳が影同心だと知り、諦めて帰る
3/18	4/22	(翌朝)八五郎は辰三の顔を見てから決めようとして長屋に行き、辰三

		が尾黒屋から金を盗もうとしていることを知る
3/18	4/22	八五郎は尾黒屋に潜入し、黒吉原の場所を探ろうとするが、ちょうどその時、浜乃たちを乗せた駕籠が白金村に向かうのに出くわし、後をつけて黒吉原の場所を突き止める
3/19	4/23	(朝早く)典膳のところに行き、黒吉原の場所を教える
3/20	4/24	典膳、小清河に黒吉原の件を報告する 源次郎が蓼井の用心棒になったと聞かされ、八五郎は驚愕する
3/23	4/27	(この日に蓼井が黒吉原に来ることを知った真砂は、蓼井を斬ろうと御庭番衆を連れて待ち伏せていた。ところが先に典膳が襲いかかってしまったため当てが外れる。 八五郎、夕方に白金村のあたりをうろつく。そこに蓼井・源次郎が現れ、典膳と戦いになる。 (真砂は、典膳はおそらく隠密影同心であろうと気づき、きっと自分と目的は同じなのだろうと察する。)真砂が間に割って入る 八五郎、藤四郎に浜乃の正体を尋ねて逆に全部を喋らされる。
3/24	4/28	藤四郎に言われた八五郎、典膳にタレコミをする。
3/25	4/29	蓼井、小清河に会って黒吉原を閉じることを懇願するが断られる
3/26	4/30	白金の屋敷で焦る蓼井、源次郎、浜乃を見つけて黒吉原の真実を知り後悔する。
3/29	5/3	蓼井、白金村に向かう。源次郎と典膳の再戦～小清河登場～公儀御庭番の乱入～小清河と源次郎の戦い
3/30	5/4	(翌朝)八ツ手小僧が浜乃の家に五十両を投げ込む 藤四郎、尾黒屋に金を返したことにする
4/2	5/6	(数日後)浜乃が帰ってくる

以上